

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24510343

研究課題名(和文) 記憶の装置としての学校 現代台湾における植民地記憶の語りに関する社会学的研究

研究課題名(英文) School as a Memory Device: Sociological study of the national discourse of Taiwan under Japanese colonial rule

研究代表者

林 初梅(LIN, CHUMEI)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：20609573

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：台湾には日本統治時代に創設された学校が多い。本研究はそれらの学校を対象に、日本統治時代をめぐる歴史・記憶がどのように語られ、どのように受容されているか、を考察したものである。研究期間において現台北市内における小中学校の校史室の展示内容と創立記念行事の実施状況の全体像を明らかにした。また、台南一中同窓会・南中会とその後継校である台南二中の戦後交流のプロセスも解明した。本研究では、戦前の記憶の持続が促された要因として、日本人引揚者同窓会というネットワークと1990年代学校教育に導入された郷土教育とがあげられると指摘した。

研究成果の概要(英文)：Many educational institutions in Taiwan were established under the Japanese colonial rule. This study focuses on how these institutions interpret history of Taiwan under Japanese control by examining the school history exhibits displayed in primary and secondary schools in Taipei and analyzing the style and substance of ceremonies commemorating respective school foundations. This study further looks at the Japanese alumni association of Tainan First Secondary School, Nanchukai, and its post-World War Two interactions with their alma mater, known today as Tainan Second Senior High School. What are the factors behind the assiduous preservation of colonial history within these institutional contexts? This study concludes that the network of Japanese alumni associations, and ethno-historic education in Taiwan initiated by the government in the 1990s played critical roles in this process.

研究分野：近現代台湾研究、言語社会学

キーワード：台湾 日本統治時代 学校 集合的記憶 郷土教育 校史室 植民地 歴史

1. 研究開始当初の背景

戦後当初の台湾は、脱日本化が喫緊の課題だとされていた。しかし、今日、多くの学校は自らの歴史を日本統治時代までに遡り、「百十周年校慶」「百周年校慶」「九十周年校慶」などの周年記念行事を行い、さらに学校史の編纂、校史室の展示を通して日本統治時代からの連続する歴史・記憶を書き留めようとしている。植民地の記憶は長きにわたって「遺毒」として払拭すべきものだと言われていたが、今は多くの台湾人に受容されている。本研究が、日本統治時代の記憶のありように注目するのは、植民地宗主国日本に対する評価が戦後 60 年の間に逆転するほど著しく変化したという経緯があるからである。

2. 研究の目的

本研究は、今日台湾で日本統治時代(1895～1945年)創設の学校をめぐる植民地の記憶がどのように再編成され、表象され、また装置として利用されてきたのか、を考察することを目的としている。

台湾では 1980 年代から言論の自由化が進行し始めた。それとともに日本統治時代をめぐる記憶の語りも表出し始めた。記憶の語りは校史室の充実化や創立記念行事の変質を引き起こした。そしてそれがさらなる記憶の語りを生み出している。本研究はそのような過程で進行する日本統治時代の記憶をめぐる諸相を分析の対象とするが、特に日本統治時代創設の学校をめぐる記憶の語りに注目する。

具体的には、各学校に設置されている校史室や創立記念行事が日本統治時代の「集合的記憶を表象する場」であることをふまえ、日本統治時代からの連続性がどのように記憶・表象されているかを各学校の実態から分析し、どのような要因がその記憶の持続を促しているのかを解明する。

3. 研究の方法

(1) 文献調査

月刊『台湾協会報』の引揚者記事、教育部公報、省政府公報の関連記事、各学校の出版物、記念誌、同窓会報、同窓会誌、日本人引揚者と日本語世代台湾人の自伝などを蒐集した。

(2) アンケート調査

戦前と戦後とのつながりの現状を確認するため、台北市の小学校(調査時は 153 校)に調査票を郵送し、予備調査(アンケート調査)を行った。次に日本統治時代に設立された学校(現存 60 校、小中高大学を含む)に絞って二次調査(アンケート調査)を行った。

(3) アンケートの調査結果を検証するため、各学校の出版物、ホームページなどの照合

も行った。

(4) オーラルヒストリーの採集と聴き取り調査

学校関係者、戦後世代台湾人へのインタビュー、日本語世代台湾人、日本人引揚者へのインタビューを行った。

(5) 日台双方の研究者を招き、国際研究集会を開催した。

(6) 日本統治時代に創設された学校を訪問して実態調査を進めた。

(7) 日本語世代台湾人の集まり、台湾引揚者同窓会・同郷会の定例会に参加した。

4. 研究成果

(1) 現台北市における学校創立記念行事運営の傾向及び校史室設置の実態を明らかにしたこと

本研究の第一段階として、現・台北市行政地域内の国公立の学校を中心に調査した。台北市を例として取り上げるのは、学校数が多いばかりでなく、台湾全土の学校における歴史の連続・非連続の多くのパターンが表出しているからである。結果、以下の 6 点が明らかとなった。

① 現台北市内には日本統治時代創設の学校は 60 校ある。終戦時には 66 校あったが、廃校になったのは、樺山国民学校、建成国民学校の 2 校、吸収・合併になったのは、台北第四中学校、台北第二高等女学校、台北第四高等女学校、台北第二商業学校の 4 校であった。

② 多くの学校は日本統治時代のキャンパス、校舎などをそのまま受け継いでいる。一部は士林国民小学、日新国民小学など、学校名すら変わっていない。

③ 多くの学校は連続性を強調し、創立周年の年数を戦前の開校日から数えている。また創立記念行事の挙行、記念碑と旧校舎の保存、そして校史室の設置を通じて戦前からの連続性を取り戻そうとする動きも見られる。

④ 校史室の大多数は 1980 年代以降に設置されている。そして、その設置数は 1990 年代以降に急増し、2000 年代以降にさらに加速化した。

⑤ 語り手の世代交替という現象が起きている。植民地時代の教育を経験した多くの人達はその経験を生かして校史室の設置、展示に携わる。植民地体験を持たない戦後世代も戦前世代から話を聞いたり、写真・展示物を蒐集したりして日本語教育世代と一緒に記憶の再生作業を担っている。

⑥ 日本統治時代に創設された学校は可視化された記憶の場であって、直接或いは間接的に、戦後の台湾社会における日本統治時代の

記憶を蘇らせる役割を果たしていると捉えられる。

(2) 学校における校史室の展示内容、旧校舎と記念碑の保存に関して実態を明らかにしたこと

戦前の建築物、校舎、記念碑などは、植民地の記憶の形成・再構成において視覚表象という点で大きな役割を担っていると考えられる。勿論、旧校舎、記念碑が全く残されていない学校も多く、日本統治時代の記憶を再現する構内の空間は学校によってバラツキが大きい。しかし、門柱、記念碑、旧校舎を文化遺産として大切に保存する学校が多い。また、校史室の設置は 1990 年代以降には普遍的に見られる現象であった。日本統治時代の集会的記憶の表象は、校史室、旧校舎、記念碑などの展示によって表現され、実体化されていると捉えられる。

展示内容についていえば、取捨選択基準は、学校によって異なり、多種多様な要因が関わっているが、戦前からの連続性を求める点で多くの学校が共通している。

図 1 と図 2 は 2014 年に創立百周年を迎えた台南第二高級中学（戦前の台南第一中学）の写真である。図 3 と図 4 は 2015 年に創立 120 周年を迎えた士林国民小学（戦前は八芝蘭公学校、士林公学校、士林国民学校のように数回の改称を経た）の写真である。いずれも日本統治時代の記憶を集約する場となっており、記憶を喚起している。



図 1. 復元された旧校門。右門柱に台湾総督府台南中学校の文字が刻まれている。（台南第二高級中学）



図 2. 2014 年創立百年祭の時に公開された校史室。戦前歴代校長の写真が展示されている。（台南第二高級中学）



図 3. 「八芝蘭公学校」が刻まれた古い門柱は構内の一角に飾られている。（士林国民小学）



図 4. 復古調の門柱は学校の玄関の表側に飾られている。（士林国民小学）

(3) 1990 年代の郷土教育と日本統治時代の記憶化との関連性を解明したこと

近年、台湾で盛んとなった日本統治時代の遺構の保存・図書の復刻事業は 1990 年代の郷土教育による台湾人の「郷土探し」によってもたらされたものである。

日本統治時代をめぐる記憶の表象について全く選別しないわけでもないが、多くは郷土に根付く文化的アイデンティティとして受容された。なかでも、文献の翻訳、復刻ブーム及び文化財としての建築物の保存運動は際立っており、その象徴である。



図 5. 戦前は北投温泉公衆浴場だったが、今は北投温泉博物館として一般公開されている。

「郷土探し」から保存への展開・再利用、そして記憶化へと進む様子を、本研究は① 戦

前の郷土読本の復刻・翻訳作業（図6）、②北投温泉公衆浴場（現在は北投温泉博物館、図5）の保存、復元と再利用から分析した。その両者は、郷土教育の直接の落とし子であり、1990年代の台湾の郷土教育の社会的影響の大きさを物語る代表例である。



図6. 左：羅東公学校編(1936)『羅東郷土資料』の復刻本
右：北埔公学校編(1930)『郷土誌』の中国語翻訳本

記憶の表象はもはや当時の実態のままのものではなく、むしろ1990年代以降の台湾社会で二次的に再構築されている側面を有する。しかし郷土教育の実施により、日本統治時代の記憶が台湾人の郷土意識の一要素としての役割を果たし、より多くの戦後世代の語り手が生み出されるようになった。記憶の再生は世代を越えて集合的枠組みによって行われるということが特徴であり、それもまた植民地の記憶を持続させる要因の一つとなっている。

(4) 植民地の記憶を持続させる要因として同窓会というネットワークからの影響を解明したこと。

1970年代以降、大規模な日本人引揚者同窓会による訪台や母校訪問が数多く行われたことも、今日の台湾における日本統治時代の学校記憶を形作った一つの要因である。

この点について本研究は戦前の台南第一中学校同窓会（南中会）と戦後の後継校である台南第二高級中学の事例を通して分析し、さらにその記憶が一個人や一学校によるものではなく、日本人引揚者と台湾社会との相互影響の結果であることを論証した。

日本人引揚者同窓会や同郷会の結成、帰国後なお台湾の母校を気にかけるなどといったことには、台湾への郷愁が最も大きく関わっていると思われる。そのため日本人引揚者同窓会や同郷会は戦後も途絶えずに台湾との交流を持ち続けたが、その影響は大きく、日本統治時代の記憶は消えることなく台湾社会にあり続けた。

彼らは創立記念式典に参加するにとどまらず、校史室の展示、旧校舎の保存に携わり、校史編纂の資料提供なども行ったりしてき

た。すなわち、同窓会は、校史室、旧校舎の保存、記念碑を中心に広がる日本統治時代の記憶の地平を支えてきた代表的なものであると捉えられる。

日本統治時代の学校記憶は、台湾社会を中心としながらも、日本人引揚者との関わりのなかで維持されるとともに構築されてきたといえる。

(5) 社会への発信及び関連研究の相互理解を目的として日台双方の研究者を招聘して2013年11月から2015年2月まで計5回の国際研究集会を開催した。

第一回研究会（開催日時：2013年11月30日、会場：一橋大学）

- ・松永正義「戦後台湾における日本と日本語」
- ・陳 培豊「歌謡曲から見た台湾人の記憶—植民地統治期終息の前後」

第二回研究会（開催日時：2014年3月15日、会場：早稲田大学）

- ・四方田犬彦「台湾における日本映画の影響—石原裕次郎を中心に」

第三回研究会（開催日時：2014年7月13日、会場：大阪大学東京田町オフィス）

- ・赤松美和子「現代台湾映画における「日本時代」を考える」

- ・蔡 蕙頻「職業を持つ台湾人女性のエリート意識の形成について：看護婦を例として」

第四回研究会（開催日時：2014年9月20日、会場：東京女子大学）

- ・王 耀徳／林 容慧「1945年前後台湾の化粧文化」

- ・石井清輝「日本統治期の遺構の保存活動における「日本」の位置—台湾における日本式木造家屋群を対象として」

第五回（開催日時：2015年2月14日、会場：大阪大学東京オフィス）

- ・石 計生「歌仔本、雑誌の伝播：日台国境を越えた戦後初期の中野忠晴の文化的影響」

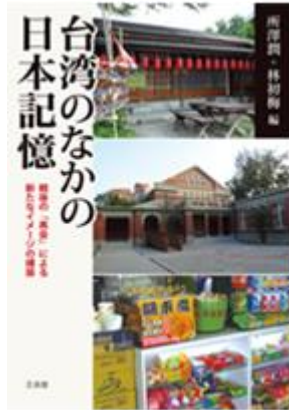
- ・橋本恭子「父を語る、台湾を語る — 台北帝大教員の子供たちが語る台湾体験」

- ・林 初梅「現代台湾における植民地記憶が形成される土壌—日本人引揚者同窓会の戦後に注目して」

(6) 学術図書の公刊

国際研究集会の成果でもあるが、以下の図書を三元社から刊行した。所澤潤・林初梅編著『台湾のなかの日本記憶—戦後の「再会」による新たなイメージの構築』2016年3月、三元社。同書は文学、歌謡、映画、看護婦、家屋、学校など様々な側面から、戦後台湾における日本統治時代の記憶の様態と変容を探っている。内容は以下のように構成されている。

序章 あの頃の台湾（所澤潤）



- 第一章 戦後台湾における日本語と日本イメージ (松永正義)
 第二章 植民地体制下の台湾の民謡 (陳培豊)
 第三章 歌謡、歌謡曲集、雑誌の流通 (石計生)
 第四章 台湾における石原裕次郎の影響 (四方田犬彦)
 第五章 現代台湾映画における「日本時代」の語り (赤松美和子)
 第六章 台湾女性エリートの意識の形成とその変・不変 (蔡蕙頻)
 第七章 植民地時代の遺構をめぐる価値の生成と「日本」の位相 (石井清輝)
 第八章 湾生日本人同窓会とその台湾母校 (林初梅)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

① 雑誌論文 (計 10 件)

- 1) 所澤潤「陳逸楽オーラルヒストリー」『台湾口述歴史研究』査読なし、第17集、2016年3月
- 2) 所澤潤「鈴木れいこオーラルヒストリー」『台湾口述歴史研究』査読なし、第15集、2016年3月
- 3) 所澤潤「台湾人女子最初の帝大生—長谷川ミエと張美恵」『段丘』査読なし、第19号、「段丘」同人、pp. 46-56、2015年9月
- 4) 所澤潤「三吉勝夫オーラルヒストリー」『台湾口述歴史研究』査読なし、第14集、2015年3月
- 5) 林初梅「魏徳聖の三部作『海角七号』『セデック・バレ』『KANO』を鑑賞して」『東方』査読なし、408号、東方書店、pp. 2-6、2015年2月
- 6) 所澤潤「社会的リーダー階層と台北高等学校—台湾人生徒にとっての入試と「立身出世」—」蔡錦堂編『台北高等学校創立90周年国際学術研究会論文集』査読なし、台湾師範大学台湾史研究所、pp. 215-264、

2014年4月

- 7) 所澤潤「“我的訪談主題及経験—日治時代台湾人的「自我塑像史」”(拙稿・1995)について」『未来の保育と教育—東京未来大学実習サポートセンター紀要—』査読あり、創刊号、東京未来大学実習サポートセンター 発行、pp. 35-44、2014年3月
- 8) 所澤潤「郭林碧蓮オーラルヒストリー」『台湾口述歴史研究』査読なし、第8集、東京女子大学栗原研究室・群馬大学所澤研究室、2013年3月、pp. 1-170
- 9) 林初梅「学校という記憶の場—植民地台湾の時代からの連続性に注目して」『言語文化研究』査読あり、39号、2013年3月、pp. 149-174
- 10) 林初梅「1930年代植民地台湾の郷土教育論の一側面—在台「内地」人児童の郷土化と台湾人児童の日本化をめぐる葛藤」『植民地教育史年報』査読なし、15号、2013年3月、pp. 10-28

② 学会発表 (計 6 件)

- 1) 林初梅「現代台湾における植民地記憶が形成される土壌—日本人引揚者同窓会の戦後に注目して」「台湾における植民地記憶の語りに関する研究」第5回研究会、2015年2月14日、大阪大学東京オフィス(東京都千代田区)
- 2) 所澤潤「台湾人女子最初の帝大生、国立台湾大学最初的女子卒業生—故・張美恵氏のスペインでの聴取りを通して」国際シンポジウム「日本敗戦と新しい国境による台湾・沖縄の変容の口述歴史に基づく研究」2014年8月31日、中央研究院台湾史研究所、台北市(台湾)
- 3) 林初梅「植民地記憶の語りのなかの「郷土」—1945年を境とする連続・断絶」日本比較文学会第76回全国大会ワークショップ「ナショナリズムと郷愁—〈郷土〉の虚構性と重層性」2014年6月、成城大学(東京都世田谷区)
- 4) 所澤潤「台北高等学校の入学者選抜の仕組みをめぐって」台北高等学校創立90周年国際シンポジウム、口頭発表、2012年10月11-12日、台湾師範大学、台北市(台湾)
- 5) 林初梅「台湾に現れた三つの郷土教育—郷土概念の相違に注目して」中京大学社会科学研究所日台共同研究シンポジウム「2012年、東アジアにおける日本と台湾」2012年7月1日、中京大学(愛知県名古屋)
- 6) 林初梅「「郷土台湾」の文化表象とその実践—台湾の郷土教育の展開からみて」人文地理学会(第23回地理教育研究部会/第109回地理思想研究部会)、2012年6月23日、「兵庫教育大学神戸サテライト(兵庫県神戸市)」

③ 図書 (計 5 件)

- 1) 所澤潤・林初梅共編著『台湾のなかの日本記憶—戦後の「再会」による新たなイメージの構築』三元社、2016年3月、全306ページ（所澤潤執筆部分 pp. 9-44）（林初梅執筆部分 pp. 253-297）
- 2) 林初梅「台湾に現れた三つの郷土教育—郷土探し、そして日本統治時代の「遺緒」との出会い」檜山幸夫編『歴史のなかの日本と台湾』中京大学社会科学研究所、2014年、pp. 195-224
- 3) 所澤潤「台湾—6-3-3-4 制上の独自モデルの追求」馬越徹・大塚豊編『アジアの中等教育改革』東信堂、pp. 54-91、2013年4月
- 4) 林初梅編・小川尚義著『小川尚義論文集〔復刻版〕—日本統治時代における台湾諸言語研究』三元社、2012年11月、全629ページ（林初梅執筆論文：「言語学者・小川尚義とその時代」 pp. 583-624）
- 5) 所澤潤「台北帝国大学」（p. 260）、「中央研究院」（p. 269）、「国立編訳館」（p. 176）日本比較教育学会（編）『比較教育学事典』2012年6月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 初梅 (LIN CHUMEI)
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号：20609573

(2) 連携研究者

所澤 潤 (SHOZAWA JUN)
東京未来大学・こども心理学部・教授
群馬大学・名誉教授
研究者番号：00235722

(3) 研究協力者

- ・松永正義（一橋大学・名誉教授）
- ・四方田犬彦
- ・陳 培豊（台湾中央研究院・台湾史研究所・研究員）
- ・石 計生（東呉大学・社会学科・教授）
- ・王 耀徳（嘉南薬理科技大学・観光事業管理学科・助理教授）
- ・林 容慧（台南応用科技大学・生活科技学院・助理教授）
- ・橋本恭子（日本社会事業大学・非常勤講師）
- ・赤松美和子（大妻女子大学・比較文化学部・准教授）
- ・石井清輝（高崎経済大学・地域政策学部・准教授）
- ・蔡 蕙頻（国立台湾図書館専門職員）